

郷音

～ KOURU ～

流



微妙香潔
みまようこうけつ

常磐自動車道那珂インターより西に約5キロ茨城放送と那珂市のネーミングプロジェクトで那珂エコミュニ公園と新たに名付けられた那珂総合公園

4ヘクタール(4万平米)の広大な敷地には、夏の訪れとともに25万本のヒマワリが咲き誇る。大地に支えられ、光を浴び、雨に打たれて咲くヒマワリは、一つひとつに名前があるわけでもなく何か能力を持ち合わせているわけでもない。ただそこに咲くだけで輝きを放ち、人々を魅了する。：人はどうだろうか。皆が同じではなく、他との差に輝きを見、特別な存在に対してのみ称賛する。差を求め働き、優劣や勝ち負けの海に溺れてゆく。ヒマワリが私に問いかける。『差がなくてもいい。ただあなたがそこにいるだけで尊い。』人の輝きを曇らせているのは、もしかしたら私自身の視点なのかもしれない。

ひたちなか市清心寺増田廣樹

写真：ひたちなか市 光泉寺 大内光

ひと



かすみがうら市 往西寺 門徒推進員

安永 昭二 さん
的場 トシ子さん

朝日が水田をきらめかせる

梵鐘の音が澄んだ空に響き渡る

往西寺さんのお晨朝（朝の読経）を訪ねました。

お晨朝の流れは？

安永 昭二（以下 安と称する）

5 時 45 分くらいにお寺にやってきて、ご住職さんがご本堂の掃き掃除などがされている間に、体操をしながら梵鐘をつく準備をしています。そして朝 6 時丁度に鐘を付き始めます。鐘の音を聞いている方もおられると思うので、時計を見ながら正確な時間につくよう努めています。お晨朝に参加している仲間とお寺の方々と共にお正信偈（繰読み）のお勤めをし、浄土真宗の生活信条を拝読します。そのあと、住職さんがお話をしてくださいます。最後に、みなさんでラジオ体操をするのが一連の流れですね。

雨が降っても風が吹いても参っています。今では参るのが当たり前になっていますね。

的場 トシ子（以下のと称する）

ご本堂で阿弥陀さまにご挨拶しお勤めするのが一日の始まり、まとめです。しないと始まらないですし、落ち着かないですね。

お花畑の手入れもありますよ。お寺に来られる方に極楽の花畑を見ていただきたいと思いい、お手入れしています。

いつから参られるように？

安 定年で仕事終えたところからですね。「お寺でお朝事をやっているなら参加しようかな」という気持ちから参るようになりました。

的 私は主人が亡くなった頃からです。弔いの気持ちから、お参りするようになりました。こちらでお経をおつとめしていますと自分の気持ちがまとまりません。

不思議なもので来ているうちに家の中を這っている虫を殺せないようになりました。

ゴキブリだって取って逃がしてあげるようになってんです。自然と。「いのち」に対する眼差しを仏さまが育ててくれました。



Profile

やすなが しょうじ 安永 昭二(左) / まとば ことし 的場 トシ子(右)

趣味・特技：読書・英語の勉強 / 読書

好きな言葉：とくになし / 和顔愛語



ご自身よりも若い方へ伝えたいことは？

安 「誰かが亡くなってそれを機会に」でも良いんですけど、本当はいますぐにでも、いつでもどこでどんな死に方してもいいと思えるお念仏の教えに遇ってほしいですね。

的 私の主人も似たようなことを言っていました。亡くなる前に「家族ぐるみで聴聞しないとだめ」と言っていたのを思い出します。

今となってみれば、もう少し若い時から聴聞していたら良かったと思ってるんですよ。

ですから、色んな方がお寺に参られるご縁を作っていくと思いますね。

お晨朝も良かったらお越しください。

後記

気持ち悪いという理由でゴキブリを殺す生活とそこにいのちの輝きを見出し時間をかけてでも逃がそうとする生活、不便でも後者の方が豊かな人生ではないでしょうか。

仏教は死後の教えではなく、いまここを生きる私が解放されていく教えです。

私が抱いている善悪の価値観、また社会が作る常識、それらが自らを縛り苦しめ、また他者を苦しめる環境を作っていると仏教では説きます。

自らの心を縛るものに気づかされそこから解放されていく、身はこの世にあっても心は浄土につながっていく、ここに仏教のご利益があります。

どうぞ、ご縁ある際には仏法聴聞されてください。

聞き手：水戸市 安楽寺 澤田唯

往西寺(かすみがうら市下土田¹⁴¹)では毎朝お晨朝(朝の読経)を執り行っております。

4月～10月は6時から、11月～3月は6時30分からとなっております。

どなたでもお待ちしております。

～茨城の念仏道場を尋ねて～

しょうにつきん じょうみょうじ 松目山 浄妙寺



ひたちなか海浜鉄道の終着駅である阿字ヶ浦駅から徒歩で10分ほど。県内有数の海水浴場である阿字ヶ浦海岸の西側に浄妙寺は位置する。木々に囲まれた参道を抜けると、明治時代に再建された本堂が参拝者を迎えてくれる。本堂の脇には枯山水の庭園があり、同寺に訪れた日は雨空で、芽吹き始めた若葉に一層瑞々しさが感じられた。

800年の歴史を今に伝える

浄妙寺は、親鸞聖人の高弟である信願房が開いた寺である。貞応2年(1223)年、那須資村が31歳のとき、親鸞聖人の弟子となり、聖人から「信願」という法名を賜ったと伝えられている。文永10年(1273年)信願房が81歳で入寂した後、光泉信願堂というお堂が建立された。これが今の浄妙寺の由来である。同寺は1723年(享保8年)に現在の阿字ヶ浦に移転をし、その後幕末の動乱に巻き込まれ火事で消失してしまいが、1892年(明治25年)に再建され現在に至る。

地域に開かれたお寺を目指して

浄妙寺の那須信彰住職は平成11年に21代目住職となってから、地域に開かれたお寺を目指して法務にあたっている。そのなかで、40年近く続けているのが子供たちのためのサマースクールだ。浄妙寺のサマースクールに参加するのは、地域の小学生が中心で、



仏さまの話や座禅などのお寺だからこそできる体験や、花火や肝試しといった誰でも楽しめるような遊びも企画している。「お寺に携わり始めたころ、お寺に関わって下さる方は、みんな年上の大先輩ばかりでした。そのなかで自分に何ができるか考えたとき、サマースクールを思い立ちました。」と住職は語る。

「40年近く続けていると、何度もサマースクールをやめようかなと思う時がありました。それでも、参加してくれた子供たちが大きくなって20歳になったとき『20歳のサマースクールをやってくれませんか』と言われたときは嬉しかったですね。もう一回頑張ろうと思えました。」

最後に好きな言葉を聞くと、「『温故知新』ですね。故きを温ねて新しきを知る。特に若い人には、伝統と新しいものどちらも大事にしてほしいですね。伝統を守りながら、新しいものを生み出していくことが大事だと思います。」

老木から芽吹く葉が決して古い葉ではないように、浄妙寺は子供たちの未来を育んでいる。

聞き手：行方市 豊安寺 板敷諒

茨城東組広報誌『響流』第十四号
二〇二二年九月発行
発行／浄土真宗本願寺派茨城東組実践運動
〒三一三〇一二三
常陸太田市久米町二〇一 正念寺内
編集／茨城東組 阿闍世の会